News & Scope
Handai Hospital
阪大病院ニュース
第42号
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会（総務課）
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載　（この紙面は再生紙を使っています）

住所／〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15　TEL／06-6879-5021

阪大の2チームが被災地で救護活動

東日本大震災による津波で甚大な被害を受けた地域での医療支援活動をするために、阪大病院高度救命救急センターの医師らが中心となった災害時における初期の重症患者の診療、搬送をするDMAT（災害派遣医療チーム）の阪大チーム（医師2人、看護師2人、事務職員1人）とドクターヘリチーム（医師2人、看護師、操縦士、整備士各1人）の2チームが3月12日から15日まで東北地方で救護活動を行いました。

「DMAT」「ドクターヘリ」医師ら計10人、東北に派遣

阪神淡路大震災以後、センターの医師、看護師はDMAT研修を受けて、災害派遣に備えてきました。現在、DMATとして出動できる医師は11人、看護師が7人おり、現地での宿泊や食事、情報伝達や輸送の手配などの支援をする事務員も4人います。

今回のDMATチームも研修を受けた医師らで編成され、伊丹空港から自衛隊機で現地へ向かいました。岩手県・花巻空港に設けられた治療できない患者さんらを遠隔の病院などへ搬送するために重症度を判断する施設（SCU）で活動をしました。SCUからは羽田空港と千歳空港へ重症と判断された数人ずつを搬送しました。

ドクターヘリチームは仙台市のDMATの拠点で情報を収集して、対策本部の指示で津波によって孤立してしまった石巻市立病院での救護活動に当たりました。2、3日目に手術が必要な人などを治療のできる病院に運びました。4日目になると、停電などの影響で高齢者を中心に4人もの死者が出ていることがわかり、寝たきりの高齢者など100人ほどのうち、早期に治療が必要な人たち約50人を他のドクターヘリチームとも協力しながら治療可能な病院へ移送しました。

今回の災害では阪神淡路大震災とは大きく異なって瓦礫にはさまれてのクラッシュ症候群や外傷、熱傷のために本当に緊急に治療を要する被災者はほとんどいないのが特徴でした。DMAT本来の活動とは違ったものでしたが、南海、東南海地震による大津波が予想されるだけに、嶋津岳士センター長は「この経験をもとに大津波による被害における救急医療のあり方を考えていかなければなりません」と話しています。

被災地に飛んだドクターヘリ

DMATによる花巻空港内のSCUでの医療活動

ドクターヘリ内での治療

孤立した石巻市立病院

府内の救急病院と高速ネットで緊急時に専門医の適切な医療

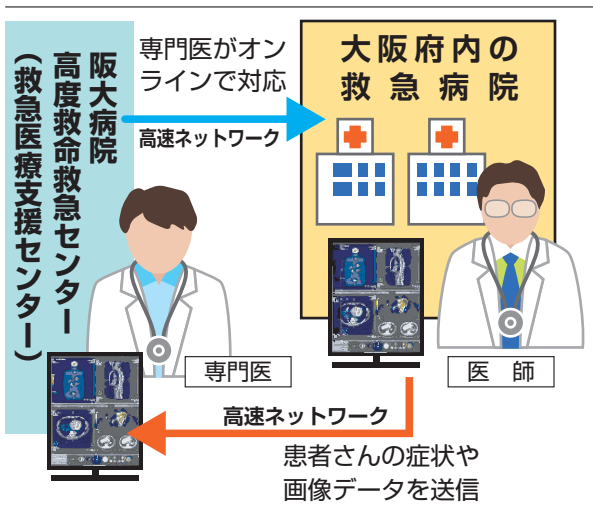
救急医療支援センター

阪大病院高度救命救急センターを救急医療支援センターとし、大阪府内の救急病院と高速ネットワークで結び、救急病院では対応が難しい症例に関して阪大病院の専門医がオンラインでサポートする事業が順調に動いています。

この事業は厚生労働省のモデル事業で、一昨年からスタートしました。阪大病院にはハートセンターや脳卒中センター、総合周産期母子医療センターを始めとして、緊急的な処置の必要な患者さんに適切な医療を提供できる体制が整っており、その他の診療科でも高度な医療を行える専門医が多数在籍しているところから全国で唯一の施設として選ばれました。

支援センターとしては、済生会千里病院、市立泉佐野病院、星ヶ丘厚生年金病院、大阪脳神経外科病院の4施設との間を高速ネットワークで結び、院内では各センターに常駐の医師を配置するとともに、各病院の救急から送られてきた画像を高品質で見ることができるモニターを備えるなど、症例に適した専門医がオンラインで対応できるように設備を整えました。今年度からは新たに市立池田病院と中河内救命救急センターとも結ばれることになっています。

試行期間の昨年7月末までに11件の相談があり、本格運用が始まった昨年8月から今年3月末までに40件の相談がありました。いずれも、高度の専門知識を要する症例でありセンターの存在意義を裏付けるものでした。今年度末までのモデル事業ですが、これまでの実績から救急医療をサポートするシステムとして期待されています。



患者さんにとってより良い病院に

病院機能評価の認定証更新

認定証
Certificate of Accreditation
認定第GB219-3号
Accreditation Number
審査体制区分4
(ver.6.0)
Assessment system division 4
病院名
Hospital Name
大阪大学医学部附属病院　殿
Osaka University Hospital
貴病院が日本医療機能評価機構の定める認定基準を達成していることを証する
This is to certify that the above hospital has demonstrated satisfactory compliance with the applicable JCQHC accreditation standards.
認定期間：2011年1月22日～2016年1月21日
January 22,2011-January 21,2016
発行日：2011年2月4日
Issue Date : February 4,2011
財団法人 日本医療機能評価機構　理事長　井原　哲夫
Japan Council for Quality Health Care　Chairman of the Board　Tetsuo Ihara

阪大病院が病院の基本方針に基づいた医療を適切に行っているかを第三者機関である日本医療機能評価機構が評価する病院機能評価が行われ、Ver.6.0での認定証が2月4日付で発行されました。阪大病院が患者さんのために質の高い安全な医療を提供していることを認められたものと誇りに思っています。

機能評価は5年ごとに行われており、今回が3度目の評価です。電子カルテやイントラネットの充実、安全衛生管理の徹底などを高く評価いただき、評価委員からの改善点の指摘もなく、認定が更新されました。これからも、5年後の更新までに病院全体として取り組むべき課題を自己評価し、更なる基盤整備に努めて、患者さんにとってより良い病院を目指していきます。

前立腺がんに高度な治療

泌尿器科

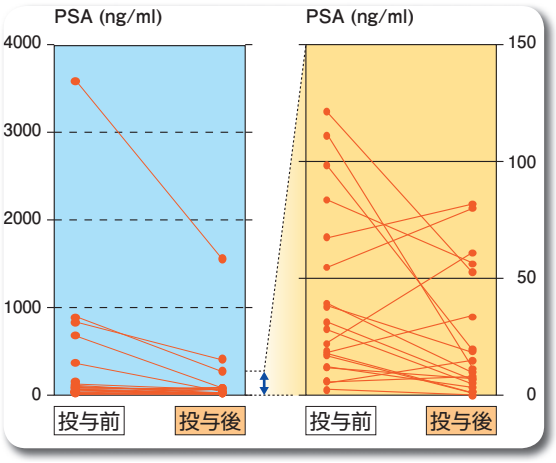
阪大病院の泌尿器科は腎臓や膀胱、前立腺に関する病気や男性不妊について幅広く高度な治療を行っています。特に、男性のがんの中でも著しく増加している前立腺がんに対してはあらゆる治療法が行える全国でも数少ない施設です。さらに、難治性の前立腺がんの先進的な治療法も開発しています。

前立腺がんになる男性は食生活の欧米化や高齢化によって2020年には1995年の約6倍にもなるとされています。前立腺がんの早期発見に有効とされているPSA検査が普及したことも増加に拍車をかけているようです。

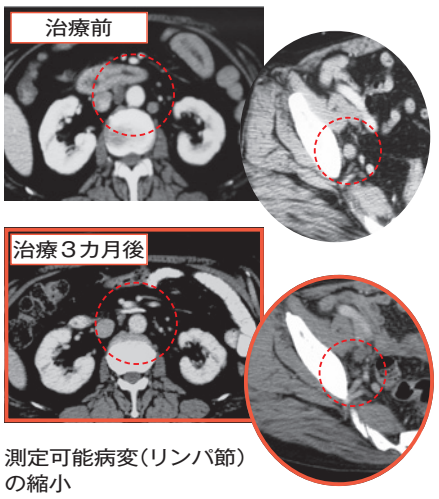
前立腺がんの治療法は外科的な手術から内視鏡による手術、放射性物質を埋め込む治療法やホルモン療法、放射線治療科と連携して放射線を照射するなど多岐にわたっています。ロボットを使った手術も行われるようになってきました。進行の遅いがんで、高齢で見つかると治療をしない待機療法という選択肢もあります。泌尿器科では前立腺がんの状態や患者さんの希望に応じて、ほとんどの治療を行うことができます。

さらに、ホルモン療法が効かなかったり、再発したりした難治性の前立腺がんに対する新しい治療法を開発し、成果を上げています。抗がん剤とステロイド剤を併用する療法で、リンパ節に転移していた病巣の縮小が見られ、「阪大レジメン」として、各地の病院で行われるようになっています。また、抗がん剤とホルモン剤の合剤など新しい薬も認可されつつあり、前立腺がんの治療はさらに進歩しています。

阪大病院泌尿器科は前立腺がんだけでなく、早期発見されにくい腎臓がんや若い男性に発症する精巣がんに対しても有効な治療法を行っています。これからも、泌尿器系のがんはもちろん、前立腺肥大や排尿障害、男性不妊など泌尿器系のあらゆる分野での臨床、研究に力を入れていきます。



ステロイド剤投与によるPSAの変化：投与1カ月後



測定可能病変（リンパ節）の縮小

妊婦さんと新生児の命守る

総合周産期母子医療センター

阪大病院の総合周産期母子医療センターはハイリスクな妊婦さんや新生児の命を守るために診療科の枠を越え、質が高く安全な医療を提供しています。また、高度救命救急センターなどと連携して突然の大量出血などで命にかかわる重症の妊婦さんを24時間体制で受け入れています。

センターがスタートして4年になりますが、大阪府北部だけでなく府内全域、京阪神など広域にわたって合併症のある妊婦さんや胎児にリスクを持つ妊婦さんが受診し、年間500を超える出産があり、高度な治療が必要な新生児は新生児集中治療室（NICU）に直接入院します。重症な妊婦さんの救急搬送も60人超を受け入れています。ドクターヘリによる近畿圏外からの搬送もあります。

母子が触れ合える新生児集中治療室（NICU）でのケア

センターの大きな特徴の一つは、阪大病院が行っている移植医療で、腎移植や膵・腎同時移植など移植を行った後に妊娠した患者さんの安全で安心な出産をサポートすることです。また、心疾患、自己免疫疾患、甲状腺疾患、糖尿病や高血圧など妊娠中、治療の難しい合併症のある妊婦さんが安全に元気な赤ちゃんを産めるよう、それぞれの疾患の専門医と連携し、病気のコントロールをしながら、胎児へ薬などの影響が出ないように出産まで注意深く診ています。

出産に際しては母体と胎児の命を守ることが最も重要ですが、できるだけ自然な分娩ができるように努め、帝王切開率は3割程度です。

また、最新鋭の4D超音波診断装置を導入しており、妊婦さんの検査でいち早く胎児の疾患が発見できるようになってきています。疾患がわかれば、小児科医を中心に胎児の治療を行いながら、出産まで無事に育て、出産後は小児外科や脳神経外科、心臓血管外科などと連携して手術を行い小さな命を救っています。

母と赤ちゃんに優しいセンターを目指している点も大きな特長です。出産後は母子同室として、母乳で育てることを基本としています。早産児や手術が必要な新生児はNICUでケアをするのですが、母と子を隔離するのではなく、毎日、午後には触れ合う機会を設けています。

大地震想定し防災訓練

近畿地方で大規模な地震が発生したという想定で、2月22日に防災訓練を開催しました。実際の災害時には、迅速で正確な情報の集約と共有が重要となりますが、本年度の訓練では、多数傷病者収容訓練に加えて、福澤病院長を本部長とした災害対策本部を設置し、院内の情報を集約することを目的とした訓練も行いました。

具体的には、各病棟から被災状況、入院患者さんの安否確認、空床数を把握して災害対策本部に伝達することとし、手術部、輸血部からも被災状況、緊急手術や輸血に対応可能か否かといった災害時に必須の情報伝達訓練を行いました。

各部門からはFAXを用いて情報を発信しましたが、FAXの回線が込み合って時間がかかるなど、実際に訓練を行うことで災害時の情報伝達の困難さを実感すると共に、確実な災害時の情報伝達を考えていく必要性も再認識しました。今年度以降もさまざまな観点から本院の災害時体制を充実させていく方針です。

傷病者のトリアージ（緊急度、重症度の判定）を行う医療チーム

福澤病院長を本部長とする災害対策本部

ホスピタルミニニュース

「いろはうた」ベストプラクティス特別賞受賞！

阪大病院で行っている「いろはうた」が、医療の質・安全学会第5回学術集会でベストプラクティス特別賞を受賞しました。

この取り組みは昨年6月から始まり、患者さんが医療および医療安全に、より積極的にかかわることができるようにお手伝いし、また患者さんと医療者とのパートナーシップを深めることを目指しています。

検査や治療の際に、患者さんご自身から名前を伝えてもらうことなど、安全な入院生活を過ごしていただくためのポイントについて、7つの句とイラストを作成しました。これらをまとめたファイルを入院患者さんにお配りし、看護師から説明を行っています。病院全体での新しい取り組みと、患者さんからの高い評価がこのたびの受賞につながりました。「いろはうた」は現在も継続中です！

市民公開フォーラム「小児がん：生活の質の向上に取り組む」

「小児がん：生活の質の向上に取り組む」についてのフォーラムが3月26日に開催されました。小児がん治療の現状と課題について小児科の太田秀明講師が解説し、次に小児がん患者の心のケアについて心のケアチームの吉津紀久子臨床心理士から説明がありました。

また、刀根山支援学校阪大病院分教室長の九後充子先生とアメリカでチャイルド・ライフ・スペシャリストの免許を取得された馬戸史子さんから院内学級の役割と病棟での取り組みがそれぞれ報告されました。参加者からはそれぞれの立場から、きめ細やかな心配りを持って子どもたちに接しているのがよくわかると、好評でした。

ギターの調べ満喫　懐かしのメロディーも春のミニコンサート

春のミニコンサートが4月7日、エントランスホールで行われました。大阪大学ギター部のポップとタンゴを得意とする2チームが出演し、懐かしい曲や、スタンダードな曲を披露しました。集まった患者さんらは「銀河鉄道999」「川の流れのように」「明日があるさ」など懐かしい曲に、しばし時間を忘れて聴き入っていました。

新規採用職員オリエンテーションを実施

東北・関東を襲った大震災から3週間が経ち、キャンパスにもようやく春の訪れを告げる桜の花が咲き始めた4月1日、銀杏会館ホールで、本院に新たに採用された職員のオリエンテーションが開催されました。例年は看護職員だけでオリエンテーションを行っていましたが、今年は1日の午前中に限り、新規採用の医療技術職員と研修医にも参加を呼びかけ、総勢212人の大規模なオリエンテーションとなりました。

福澤正洋病院長のあいさつに続き、中島和江・中央クオリティマネジメント部長が「医療安全管理」、鍋谷佳子感染制御部看護師長が「感染管理」、そして、循環器内科の山本一博特任教授は「医療人としてのプロフェッショナリズム」に関してなど、医療に携わる者として欠かすことのできない重要な示唆を与える講演が行われ、参加者は緊張の面持ちで聞いていました。